

地方分権体制のエチオピアと辺境の民族 州境をめぐる紛争とある開発プロジェクトの崩壊

著者	佐藤 廉也
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	2000-03
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008357

地方分権体制のエチオピアと 辺境の民族

州境をめぐる紛争とある開発プロジェクトの崩壊

佐藤 廉也

はじめに——民族の自治と辺境の政治意識

1991年に樹立した暫定政権をへて95年に誕生したエチオピア連邦民主共和国は、民族を基盤とする地方分権を憲法によって保証する政権として注目を集めた。多民族国家エチオピアにふさわしい多元主義的な連邦制がアフリカのあたらしい国家像として期待される一方で、あらたな民族対立の存在が指摘されるなど、現政権の評価は定まっていはいない。

しかし少なくとも、中央集権をめざした前社会主義政権と全く方向の異なる分権体制の採用によって、エチオピアの民族間関係の構図のみならず、民族集団内部の従来の社会関係もまた細部まで変わりつつあると予想される。これまで政治参加の機会をうばわれていた少数民族にも、あらたな政治意識の覚醒を促したからである。

小稿は、エチオピア国家の辺境とされてきたスーダン国境に近いガンベラ州の少数民族（マジャンギル人）の事例から、新体制下の地方政治の一断面をみようとするものである。マジャンギル人は、

エチオピア南西部の森林地帯にすむ総人口4万人に満たない少数民族だが、新しい政治体制のもとでは、州のなかでアニューワ人、ヌエル人に次いでまとまった居住域と人口を持つ第3の民族集団として認められている。彼らが自治権を持っているのは、州内にある八つのワラダ（郡）のうちのひとつ、ゴダレワラダである。

ところで、マジャンギルの人びとの国家への関わりは、現政権下ではじめて深まったとはいえない。むしろ、今日の状況の基盤は、森の中で移動生活をおこなっていたマジャンギル人に定住的な集落をつくらせた前政権のもとで形成されたといつてよい。そこで簡単にそのプロセスを述べた後、1990年代におこった二つの事件を中心に、人びとの現在おかれている状況について考えてみたい。

1 社会主義政権下での集住化

マジャンギルの人びとは、従来、近隣の人びとに「森のなかの貧しい焼畑民」とみなされていたといつてよい。1960年代以前の文献などからマジャンギルの暮らしをみると、森林を伐り開いて10世

帯にも満たない小規模な集落を形成し、小刻みにそれらの集落の移動をおこないつつ生活していた。軍事・政治的な組織を持たず、少なくとも1930年代くらいまでは、高地系民族のオロモ人、アムハラ人や低地サバンナにすむアニューワ人などから略奪のための襲撃をたびたびうけていたが、そのたびに森の奥深くへと逃げることによって、森の地の利をしらない侵略者たちの攻撃をかわしていた。

このような人びとの生活形態を大きく変えたのが、前社会主義政権時代の1970年代後半から推進された集住化（villagization）政策であった。エチオピアの他の多くの地域では抵抗にあい、全体として成功したとは言い難いこの政策であるが、マジャンギル人はこの政策を、若い世代のリーダーシップによって積極的に受け入れ、伝統的小集落を統合する形で、森の中にいくつかの集住村をつくった。集住村は国家によって最末端の行政単位として認知され、人びとは学校教育の受容もふくめ、国家との交渉を持つことになったのである。

これらの過程でリーダーシップをとったマジャンギルの多くは、メラニール・クランという特定のクラン（氏族）の出身者たちだった。このクランは、さまざまな意味で、マジャンギルという民族集団の中で特殊な位置を占めている。なかでも重要なことは、彼らの持つ宗教的・政治的力である。マジャンギルの伝統的信仰の中で、タバと呼ばれる儀礼の執行者がいる。タバは精霊と交感する力を持つとされ、占いや病気治療などをおこなうほか、タバを信仰する人びとの移住をコントロールする政治的な力を持っていた。つまり、強固な政治制度のないフラットな分散社会の中で、タバはいわば社会の求心力の源、あるいは政治権力の萌芽形態といえる存在だった。このタバはほとんどがメラニール・クランの出身者だった。

そのタバの後継者にあたるメラニールの若者た

ちが、人びとを説得して集住化をすすめ、それを通して国家との接合をおこなう上で重要な役割をはたしたのである。彼らが積極的に外部との交渉をおこない、集住化を推進した要因については詳細な検討を要する。しかし少なくとも、伝統的民族間関係においては侵略される側であり、差別される側であった人びとが、集住化の受容を通して、国家政策を巧みに利用する形で民族集団としての交渉能力と自己決定権の強化を果たしたといえる。

2 1990年代の州境問題

集住化の過程で緩やかに準備されたマジャンギル人の政治参加への体制づくりは、1991年の政権交代後、相反する政治的利益をめぐる民族間の争いに巻き込まれることによって、大きな困難に直面することになった。新体制下の州の境界設定をめぐる対立を通して、マジャンギル人と近隣民族との大きな摩擦が表面化することになったのである。最初に述べたように、マジャンギル人の居住域の主要な部分はガンベラ州に属することになり、ゴダレワラダでは、プレジデント（郡長）をはじめ、ワラダ政府の主要なポストにマジャンギル人が就いた。しかしながら、マジャンギルの居住域全体としてみると、ガンベラのほか、オロミヤ、南部州の三つに分断されることになった。

ガンベラ以外の地域では、マジャンギルの人びとは州内の絶対的少数者として、政治参加への道はほとんど閉ざされることになった。とくにゴダレワラダに接するイエキワラダが南部州に編入され、隣接民族シャカチョー人がその実権をにぎったことが、イエキにすむマジャンギルのみならず、ゴダレの人びとにも大きな不満をもたらした。コーヒー集積地としてにぎわうテビという町を中心とするこの地区は、今世紀中頃にアムハラ人などエ

チオピア高地の商人によって開拓されるまで、鬱蒼としげるマジャンギルの森だったからである。

この不満は、多くの人にとって思いがけない形で1993年に爆発した。テピをはじめ、南部州のいくつかの地域でマジャンギルが武装蜂起し、一時的に主要道路の交通を遮断しつつ、シャカチョー人側の人間とみなされた多数の人びとを殺害したのである。この局地的な戦闘は4月から9月にかけて断続的におこり、エチオピア暫定政府軍であるエチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）がテピに急遽駐留することになった後も続いた。森林内でおこなわれたある戦闘では、地の利を知るマジャンギルがEPRDF兵士を大量に殺害し、撤退させている。テピでEPRDF、マジャンギル、シャカチョー、ガンベラ州公安委員会など、関係する集団の代表を集めた会議が何度もおこなわれた後、EPRDFが突如、事件に関与したとみなした200名をこえるマジャンギルを逮捕した。その後も話し合いは継続し、マジャンギル側は歴史的経緯を根拠にイエキのゴダレ側への編入を主張したが、境界は変更されることなく現在に至る。

この事件はテピ周辺にすむ多くの人びとを驚愕させた。近隣の他民族の従来からの認識にとって、マジャンギルは、大規模な集団行動をおこなう力をもたず、少人数で森にすむおとなしい人間たちにすぎなかったからである。マジャンギルの内部でこの行動がいかに計画され、組織され、どのような指揮系統によって軍事力が行使されたか、いまだ明らかでない。しかし、ガンベラ州内のマジャンギルが支援していたのは明らかであり、広範な地域での意思統一がない限り、不可能な行動であった。伝統的イメージと全く異なったマジャンギルの姿が、事件を通して周囲の人びとの目に立ちあらわれたのである。

3 開発プロジェクトの開始と挫折

州境をめぐる問題がくすぶる中、1995年からマジャンギル自身の手による「ルマート（開発）プロジェクト」が開始された。連邦議会を通して中央から巨額の開発予算があり、各州にその運用がまかされたのである。この予算は州からさらに各ワラダに分配され、ゴダレにも、円換算で年間1000万をこえる予算が配分された。これに伴い、ワラダ政府を中心に各村の代表者が集まって会議をおこない、ルマートの実行委員会が発足した。

彼らの開発計画の中身は、焼畑農作物の共同生産・販売を中心とするものだった。利潤がある程度蓄積された後には、生活必需品を扱う商店を村落内に開店したり、診療所や学校を増設するなどして、村の生活を向上させながら、さらに開発をすすめていこうという考えだった。焼畑を生業とする彼らの中で商業を営む者は、現在までひとりもいない。この開発計画は、そのような人びとにとってまさに画期的な試みであった。

ところが、1997年夏に筆者が再訪したとき、状況は全く袋小路に陥っていた。前ルマート委員会のメンバーは人びとのリコール要求を受けて総辞職していた。人びとによって新しくえられた委員会メンバーによると、糾弾の理由はルマート予算の横領であった。訴状には次のように記されていた。旧メンバー中のメラニール・クランを中心とする者たちが、その親戚関係を通じて予算を私物化し、しかもその失われた額のゆくえは現在も明らかでない。州議会にしかるべき調査委員会をつくり、正常なプロジェクトの再開をサポートしてほしい、というのである。

不当に使用された金額は、60万ブル（約900万円）とされていた。自給生活を営む大半のマジャンギルにとっては、想像をこえる額である。旧ル

マート委員会メンバーなどから筆者が聞き取りをおこなった限りでその運用の内訳を記しておく。26万は作物を運搬するためのトラックの購入費、4万はシンセサイザー（楽器）の購入費、9万は道路工事費、4万はパーティー費用、1万は結核を病む元州議会メンバー（メラニール）のための医療費。不明金の残りのうち数万ブルは、メラニールの人びとなどにさまざまな用途のために貸与されたようである。また、ガンベラ州農業省のアニウワ人官僚への賄賂に使用されたものもあったらしい。1995年に村びとが力をあわせて伐採した焼畑の作物は、不正が告発される中、販売のために収穫されることなく、村びとが自らの食事のために委員会に無断で運んでいったそうである。

ちなみにこのとき、ガンベラ州議会は州予算の不正流用の追及で荒れ狂っていた。8月の会期中には、州プレジデント（知事。アニウワ人）、副プレジデント（副知事。ヌエル人）、書記（事務長。マジャンギル人）のトップ3人が同時に逮捕されている。ガンベラ全体の開発関係予算は2億ブルと巨額であり、ゴダレの予算はその一部だったわけである。ガンベラ州での追及が、マジャンギル人コミュニティにも飛び火した側面もあるだろう。

印象深いのは、マジャンギルにおいてこの一件が「メラニール・クランの私的利益の追求」として人びとに糾弾されていることである。旧ルマートの全メンバーがメラニール・クランというわけではない。しかし、不明金の流用をした者たちが、「メラニールの親戚どうし」として人びとに認識されているのである。

筆者の親友でもある罷免された委員長には、この件に関する長時間のインタビューをおこなった。彼は、マジャンギルが集住化をとげたのも、キリスト教を普及させたのも、全てメラニールの仕事によるものであることを繰り返し強調し、人びと

の態度は裏切り行為だと強く憤慨していた。

この顛末は、近隣との民族間関係のみならず、マジャンギル人の民族内部の構図が大きく変わつつあることを物語っている。少なくとも、コミュニティのリーダーシップを引き受けてきたメラニールの権威は、あたらしい政治体制のもとでは必ずしも自明のものとはみなされなくなった。たとえ前政権下で指導力を発揮した有能な人物であったとしても、公益に反するとみなされれば、人びとの糾弾にさらされることになるのである。

おわりに

1990年代のエチオピア地方政治の一断面をみる事例として、マジャンギル人というマイノリティが外部との交渉過程を通して変貌する姿をとりあげ、州境をめぐる紛争、開発プロジェクトの挫折というトピックを題材として考察をおこなった。

国家政策の積極的受容を通して外部勢力に対する交渉能力の強化をはたしてきたマジャンギルは、エチオピア新体制のもとで、さらに力強く自らの権利の主張をしつつも、州境の問題にみられるような、近隣民族との困難な問題に直面している。また、民主政治の考え方は多くのマジャンギル人の間にも浸透し、従来のコミュニティにおける社会関係も、以前から外部との交渉力を発揮してきたメラニール主導から、より多様なリーダーシップのあり方へと刻々と変化している。

筆者には、これらの出来事はマジャンギルの人びとがさらに確かな外部との交渉力を獲得し、自己決定によって豊かな生活を得ていくための試練であるように思われる。それらはわれわれの社会の現状と同様、一朝一夕に達成されるものではなく、試行錯誤の過程で得られるはずのものであろう。

（さとう・れんや／京都大学総合博物館）